

# 特集 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所 第12回シンポジウム 「性別を考える」ー医学・法学・スポーツ科学の対話ー

## はじめに シンポジウム開催趣旨と概要

来田 享子

(第9プロジェクト研究会)

本特集は、コミュニティ政策研究所が他の2組織と共催したシンポジウムを報告するものである。

シンポジウムは、「身体・性・科学におけるジェンダー問題研究会」および「日本スポーツとジェンダー研究会」が共催し、2004年11月21日、名古屋市女性会館にて開催された。この企画段階から、運営その他の準備には、コミュニティ政策研究所のプロジェクトの中でも、第9プロジェクトが中心になって関わってきた。

第9プロジェクトは、研究テーマを「地域スポーツクラブ発展の条件を考える」としており、プロジェクト設立以来3年間の研究成果の一部として、本シンポジウムを実現することができた。同プロジェクトでは、これまで、地域スポーツクラブの発展の条件として、クラブ構成集団の構造、指導者・指導プログラムのあり方、財源の確保とその運用等に着目し、研究を進めてきた。たとえば、2003年度は、スポーツボランティアを主な構成員とする指導者の育成と確保について検討し、NPO法人MGLA（体操リーダー連絡協議会）から講師をお招きして研究会を実施した。（参考資料 参照）

この研究会では、いわゆる競技的なスポーツではなく、体操や表現運動といった非競技的な身体活動を通じて、年齢や性別を超え、さらには文化的・社会的背景を超えた交流を可能にするイベントの運営とそれを通じてつくりあげら

れてきた人的ネットワークについて、紹介していただいた。（研究会レジュメ参照）

MGLAの活動は、身体活動を通じた人々の交流が、地域社会にはじまり、国際的な範囲にまで広げることのできる可能性を示してくれる。しかし、その一方で、こうした活動を地道に続けていくための人材の確保や指導者の資質向上といった側面からみれば、公的支援や指導者養成プログラム・システムの未整備など多くの課題を抱えていることも浮き彫りになった。

さらに、プロジェクトにおける2年間の研究を通じ、課題として浮かび上がってきたのは、次のことであった。すなわち地域スポーツクラブ、ひいては地域社会におけるスポーツのいかなる発展条件を検討する際にも共通する視点は、様々なコミュニティに存在する人々の多様性やそれらの人々のニーズをどのように理解し、その理解を活かすか、ということであった。近年のスポーツ社会学的な研究成果によれば、コミュニティスポーツの課題として、1) 閉鎖的で一部の人々の楽しみになってしまいがちなスポーツ集団を地域社会に開かれたものにする方策の検討、2) スポーツを楽しむことから結ばれた人的ネットワークが、地域社会全体の抱える課題に目を向ける方策の検討、3) スポーツクラブ等のスポーツ集団と地域社会における他の集団とを相互作用させる方策の検討、などがあげられてきた。先に述べた2年間のプロジェクト研究

から浮かび上がってきた課題は、これらスポーツ社会学における課題の大前提となるものであり、学際性の高いコミュニティ政策学の視点からならではのものであるといえよう。

このような問題意識の延長線上に、今回のシンポジウムのテーマは設定され、コミュニティに存在する人々の多様性を理解する切り口の一つとして、「性別」に着目している。

性別は、多くの場合出生のときに決定され、人格を基礎づける重要な要素のひとつである。そのため、性別には必然的に男らしさ・女らしさという「らしさ」が付随するのか、というジェンダーの問題は、人間の人格そのものにかかわる問いということもできるであろう。

近年、この「性別」を取り巻く状況は複雑になってきている。たとえば、性転換の医学的・法的な承認、それに伴う戸籍の性別記載の変更、また欧米で増えている性転換者の婚姻、および同性婚の承認は、社会や法制度において性別が果たしてきた役割や性別の基準そのものを改めて見直すことを求めている。またこうした変化によって、特に、身体のもつ意味の大きいスポーツの世界では、直接的にそれへの対応をせまられている。

このような複雑化する状況について、医学・法学・スポーツ科学という3領域の専門家にシンポジストとして登壇していただいたのが、今回のシンポジウムであった。

当日の参加者は51名で、数あるシンポジウムの中でも、珍しい領域の組み合わせとあって、東京・大阪など全国各地からの参加をいただいた。

## 1. 登壇者のテーマとプロフィール

本シンポジウムでは、以下の方々にご登壇いただき、医学・スポーツ科学・法学のそれぞれ

の専門領域から、問題提起を行っていただいた。以下に登壇者のテーマとプロフィールを紹介する。

### 1.1 シンポジスト

村田善晴氏（名古屋大学環境医学研究所教授）

テーマ：医学的にみた性の分化

＜プロフィール＞1951年（昭和26年）静岡県榛原郡吉田町に生まれる。1976年（昭和51年）金沢大学医学部卒業後、国立名古屋病院研修医、遠州総合病院内科医員、浜松医大第三内科医員を経て1981年より3年半シカゴ大学に留学。甲状腺ホルモン受容体異常症の発見者であるレフェトフ教授に師事。これを境に、臨床から研究主体の生活が始まる。1986年に帰国し、名古屋大学環境医学研究所助手、以後助教授となり、1997年より現職。趣味：ゴルフ、スキー、音楽鑑賞。現職：名古屋大学環境医学研究所 発生・遺伝分野教授。専門：内分泌学（特に甲状腺学）

近藤良享氏（筑波大学人間総合科学研究科助教授）

テーマ：スポーツと性別－女性確認検査／性転換選手容認の問題

＜プロフィール＞1953年（昭和28年）岐阜県海津郡平田町に生まれる。1977年（昭和52年）東京教育大学体育学部卒業。1979年（昭和54年）筑波大学大学院体育研究科終了後、1980年（昭和55年）から筑波大学研究協力部準研究員、1982年（昭和57年）宇都宮大学教育学部講師、1985年（昭和60年）筑波大学体育科学系講師、1995年（平成7年）より助教授、現在にいたる。この間、1987年から1年間、ニューヨーク州立大学ブロッポート校において、スポーツ哲学・倫理学者、ワーレン・フレイリー

教授に師事。以降、スポーツ倫理学の研究を本格的に始め、1998年に「スポーツ問題の応用倫理学研究」によって、博士(体育科学):筑波大学を取得し、現在に至る。趣味:(子どもの)サッカー観戦。現職:筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授。専門:スポーツ倫理学関係。業績:近藤編著(2004)スポーツ倫理の探求、大修館書店。友添、近藤(2000)スポーツ倫理を問う、大修館書店。近藤(1997)スポーツにおける女性証明検査規定に関する一考察、体育・スポーツ哲学研究、第19巻第1号、pp.53-65。公職:世界アンチ・ドーピング機構倫理・教育委員会委員(2000-2003)日本アンチ・ドーピング機構教育・倫理委員会委員(2001-現在)。日本スポーツとジェンダー研究会 理事(2002-現在)

紙谷雅子氏(学習院大学法科大学院教授)  
テーマ:法学から性別を考える—ジェンダー・セックス・セクシュアリティ

<プロフィール>現職:学習院大学大学院法務研究科(法科大学院)教授。専門:英米法関係する業績・論文:「ポルノグラフィと「女子ども」の論理」『メディアの法理と社会的責任』叢書 現代のメディアとジャーナリズム 第3巻 3章(2004年)。『「セックス」と「ジェンダー」果てしない言葉の争い』『法の臨界 第1巻』第3章(1999)。「ジェンダーとフェミニスト法学」『ジェンダーと法』岩波講座 現代の法 第11巻 第2章(1997)。「日本国憲法とフェミニズム」ジュリスト1089号(1996)「<性の商品化>と表現の自由」『性の商品化—フェミニズムの主張 2』第2章(1995)。「性的表現と繊細な神経」『リーディングス現代の憲法』第6章(1995)。A Decade of the Equal Employment Opportunity Act in Japan: Has It Changed the

Society? 25 Law in Japan: An Annual 40(1995)。「猥褻・ポルノグラフィ・エロティカ」法と民主主義1992年6月号(1992)。「娼婦と聖母の間で」『新地平』150号(1986)。Women in Japan, 20 UBC L. REV. 447-69(1986)。翻訳:ソコロフ「お金と愛情の間—マルクス主義フェミニズムの展開」(1987 共訳)。ザリツキー「資本主義・家族・個人生活:現代女性解放論」(1980 共訳)

## 1.2 コーディネーター

建石真公子氏(法政大学法学部教授)

## 1.3 司会

武田万里子氏(金城学院大学現代文化学部教授)

## 2. 共催組織の紹介

本シンポジウムは、「身体・性・科学におけるジェンダー問題研究会(以下、BG研究会と略す)」「愛知学泉大学コミュニティ政策研究所」「日本スポーツとジェンダー研究会(以下、JSSGSと略す)」の三組織が共催した。それぞれの組織の役割分掌は表1のとおりである。

表1

組織名	役割分掌
コミュニティ政策研究所	財源・広報(地方公共団体・コミュニティ関連組織等)・運営
BG研究会	財源・企画・運営・広報(ジェンダー研究機関等)
JSSGS	財源・広報(スポーツ関連研究機関・組織等)

なお、今回の共催は、コミュニティ政策研究所の研究員である本学コミュニティ政策学部専任教員のネットワークにより実現した。このように日ごろからの教員の研究活動に支えられた

人的資源を有効に活用することが、研究所ひいては学際的なコミュニティ政策学の発展に大きく寄与することが示された点にも、本シンポジウムの成果は認められる。参考までに各組織の研究活動の概要を以下に簡単に紹介しておく。

## 2.1 身体・性・科学におけるジェンダー問題研究会（BG研究会）

### 2.1.1 研究会の活動概要

本研究会は、科学技術の進展を背景とした、身体、性、生命をめぐるジェンダー問題について、医学・法学・教育学・スポーツ科学という異なる分野の研究者5名が協同して考察を進め、従来の人権及びジェンダー研究に対する新しい思考の可能性を探っている。研究会は、2003年4月から活動を開始し2006年3月まで3年間継続するプロジェクトである。これまで主な財源として（財）東海ジェンダー研究所に申請し、得られた助成金によって活動を進めてきた。2003年度は「生殖補助医療の現状と課題」をテーマに、講師を招聘して研究会を実施や、医学分野管理職に就く女性の現状に関する調査を実施した。この研究成果は、（財）東海ジェンダー研究所紀要『ジェンダー研究』に掲載される予定である。

2004年度は本シンポジウムの企画・運営が主な事業内容である。また、プロジェクトの最終年度にあたる2005年度は、「性別とは何か」という疑問に関わって、性同一性障害の当事者やセクシュアリティの問題を中心に研究を進めている研究者を講師に招いた研究会を実施する。

また同じく2005年度には、3年間の身体・性・生命をめぐるジェンダー問題のプロジェクト研究を総括する活動として、（財）東海ジェンダー研究所主催の連続講座「身体と性の未来」を担当する。さらに、これらの活動を通じて各メン

バーが得た成果を論文にまとめ、上述の『ジェンダー研究』に投稿する予定になっている。

### 2.1.2 研究会メンバー

研究会のメンバーは下記のとおりで、今回のシンポジウムで司会・コーディネーターを担当した2名が本学に在籍している。

建石真公子（たていしひろこ）（代表）憲法学  
法政大学法学部教授。杉浦ミドリ（すぎうらみどり）医学 愛知学泉大学家政学部教授。武田万里子（たけだまりこ）憲法学 金城学院大学現代文化学部教授。藤原直子（ふじわらなおこ）（庶務）教育学 椋山女学園大学人間関係学部助教授。来田享子（らいたきょうこ）（会計）体育学 愛知学泉大学コミュニティ政策学部助教授

## 2.2 日本スポーツとジェンダー研究会（JSSGS）

### 2.2.1 研究会の設立趣旨

新しい世紀を迎え、男女が性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現が、緊要の課題となっている。1999年に公布・施行された男女共同参画社会基本法には、男女が性別による差別的な取扱いを受けないことを旨とする男女の人権の尊重、社会における制度・慣行についての配慮等、5項目にわたる基本理念が掲げられている。

一方、2000年には、現代社会におけるスポーツの重要性に鑑み、わが国で初めてのスポーツ振興基本計画が策定されました。そこでは、成人の週1回以上のスポーツ実施率を50%に高めること、10年間で全国の市町村に総合型地域スポーツクラブをひとつ以上育成すること、オリンピックでのメダル獲得率を倍増すること、生涯スポーツおよび競技スポーツと学校体育・スポーツの連携を推進させる方策など、具体的

な目標が掲げられている。このように、現在ではスポーツの振興が、個人や社会の健康・教育・福祉・経済を考える上で、必要不可欠な政策課題とされているにもかかわらず、スポーツ界には性による差別が強く残り、とりわけ、女性にとって不平等・不公平が多く見られるのが現状である。

社会変革を推進するには、変革を促進するための条約や法令、理論構築、草の根運動の三つが必要といわれている。一つ目の条約・法令に関しては、国内では先に述べた男女共同参画社会基本法、国際的には女性差別撤廃条約、北京行動綱領、さらには世界女性スポーツ会議における成果文書であるブライトン宣言やウィンドホーク行動要請等が採択され、効力を発揮しつつある。また、2006年には、第4回世界女性スポーツ会議が熊本で開催されることが内定している。

しかし、スポーツにおける男女平等・公平を推進する運動、それを牽引する理論構築はまだ不十分な現状にある。わが国におけるスポーツのジェンダー研究を概観すると、体力や競技記録を性別に分析したカテゴリー的研究、メディア、コーチ・管理職、競技種目や参加に関する配分的研究が多くを占めている。スポーツのジェンダー・ポリティクスを解明するには、ジェンダーの支配構造を支え、ジェンダーの再生産装置として機能してきたスポーツの役割を明らかにする関係論的研究が必要不可欠である。これらの研究はまだ緒についたばかりであり、思想（哲学）、歴史学、社会学、文学、労働・経済、教育、芸術、メディア論等の他領域、或いは諸外国に比較すると大きな遅れをとっている。さらに、最近のジェンダー研究は、セックスとジェンダーとセクシュアリティの不連続性、性の多様性、ジェンダーの主体性、ジェンダーの南

北問題等、新たな展開をみせている。これらの知見を踏まえ、スポーツとジェンダー或いはセクシュアリティに関する研究を加速するには、この領域に関心を持つ人たちが一堂に会し論議・研究を深めることが急務であろう。

そこで、私たちは、「スポーツにおける男女平等・公平の達成」「ジェンダー・フリーなスポーツ文化の構築」を目標に、「日本スポーツとジェンダー研究会」を設立する。主な活動内容は、研究会の開催、機関誌の発刊、HP公開とし、3年後には学術組織となることを目指している。

（2002年4月設立趣旨より）

研究会 URL : <http://www.jssgs.org/>

## 2.2.2 研究会役員（2004年11月現在）

会長：飯田貴子（帝塚山学院大学教授）

理事長：井谷恵子（京都教育大学教授）

理事：梅津迪子（聖学院大学助教授）、熊安貴美江（大阪女子大学助教授）、近藤良享（筑波大学助教授）、佐野信子（立教大学専任講師）、高峰修（中京大学体育研究所）、田原淳子（中京女子大学助教授）、萩原美代子（文化女子大学教授）、平川澄子（鶴見大学助教授）、松田恵示（東京学芸大学助教授）、吉川康夫（帝塚山学院大学教授）、吉中康子（京都学園大学教授）、来田享子（愛知学泉大学助教授）、監事：大東貢生（仏教大学専任講師）、北田和美（大阪女子短期大学助教授）顧問：丹羽劭昭（聖母被昇天学院女子短期大学教授）幹事：赤坂美月（神戸学院女子短期大学助教授）、手塚美粧（帝塚山学院大学職員）

## 3. シンポジストの発表概要

### 3.1 「医学的にみた性の分化」村田善晴氏

（名古屋大学環境医学研究所教授）

医学の領域からは、村田善晴氏に「医学的にみ

た性の分化」と題する発表を行っていただいた。村田氏は、最近50年ほどの生化学・生理学・分子生物学の研究成果によって、性の決定・分化のメカニズムが解明されてきたことにもとづき、①Y染色体上のSRY遺伝子が性別の決定に重要な役割を果たしていること、②男性ホルモンであるアンドロゲンが性の分化に果たす役割、③アンドロゲンが男性のジェンダー・アイデンティティーの形成に与える影響、という3つの視点から報告された。

抄録の中で村田氏は「ヒトは何事も起こらなければ女になっていく」「男に分化するためにある、決まった装置のスイッチがONになっていることが必要で、この装置の一部でも故障した場合は女に分化してゆく」という比喩的な表現を用いて、性の分化に関する現在の科学における理解を説明している。この「装置」に該当するものとして、上記①および②については、遺伝子の構造や仕組みのほか、「装置」が完全には作動しなかった場合の症例として考えられる医学的事例が紹介された。また、アンドロゲンは、男性が自分自身を男として認識する、ジェンダー・アイデンティティーの確立にも重要な影響を及ぼしていることを示唆する事例も示された。この事例は、ジェンダー・アイデンティティーを社会的構築物であると位置づける傾向が強い、近年の人文・社会科学領域の研究成果と対立するもので、参加者の興味を強くひきつける内容であった。

### 3.2 「スポーツと性別—女性確認検査／性転換選手容認の問題」近藤良享氏（筑波大学人間総合科学研究科助教授）

スポーツ科学の領域からは「スポーツと性別—女性確認検査／性転換選手容認の問題」と題し、スポーツにおける平等原則の確立をめぐり、

性別の判断や転換によって揺れ動くスポーツ界の現状について、近藤良享氏に報告していただいた。近代以降のオリンピック大会等にその典型的な姿を見ることができるスポーツは、男性によってはじめられ、その後女性が参加するようになった文化です。そこでは、男性部門とは別の「女性」部門を設定することによって、女性のためのスポーツの発展が支えられてきたという歴史がある。しかし、1960年代以降、スポーツによる国威発揚やスポーツの商業主義化の影響を受け、女性競技者に対する「男性疑義」事件が多く生じるようになった。報告の中では、この疑義事例が紹介されるとともに、疑義事例の増加にしたがって実施されてきた「女性確認検査」の変遷や問題点が明らかにされた。さらに、性転換を行った選手の参加をある一定の条件のもとで承認するという、IOCによる新しい選手参加規定の制定によって、ある選手が女であるのか、男であるのかをめぐり、スポーツにおける平等の原則に関する議論が複雑になってきている状況が示された。これについて「性別を問わないスポーツのあり方」も視野に入れた内容で締めくくられた。

### 3.3 「法学から性別を考える—ジェンダー・セックス・セクシュアリティ」紙谷雅子氏（学習院大学法科大学院教授）

法学の領域からは紙谷雅子氏にご登壇いただき、「法学から性別を考える—ジェンダー・セックス・セクシュアリティ」と題する報告を行っていただいた。

この報告では、はじめに、1947年以降に多くの法律が改正され、差別の撤廃、形式的平等と実質的平等、平等を前提とした対等、というキーワードの進展に沿って、建前的には、男性でも女性でもない、「中性」としての人を対象とす

る法律文がつくられてきたことが紹介された。次に、現実の問題として、人は法律によって出生に関する届出時に、その性別を明白にするよう求められ、そこで届け出た性別を前提に以降の社会生活を送らざるを得ないことが指摘された。性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（平成十五年七月十六日法律第百十一号）や同性婚を禁じる法律は、人が女／男のいずれかの性別であることとともに、そこでいう性別とは法律が求めた届出にもとづくものであることを前提としている。紙谷氏はこれについて「法は曖昧さを嫌う」という表現で示し、性別に関する自己認識は法の関心事ではなかったとした上で、「性別に関する情報を人に関する指標と見做す社会は、実態にそぐわなくても、明確さを望む。分かりやすさを求めて、生き苦しい社会を招くのは、本末転倒ではないだろうか」とまとめた。



#### 4. シンポジウムのまとめ

以上の報告の後、フロアの参加者から回収した質問票に、それぞれの報告者が回答するとともに、ディスカッションが行われた。参加者から多くの熱心な質問が出されたこともあり、ディスカッションが深まってきた頃に、予定されていた時間が終了してしまったことは、非常に残念であった。

3名の登壇者の報告を通じ、人が生まれると

きに医学によって決定された性別は、社会生活を送る中で、法律の枠の中で固定化され、変えることができないもの、変わるはずのないもの、として受け止められてきていること、しかしこれまでの枠組みでは、スポーツ界での事例にみられるように、様々なひずみが生じてしまうことが浮き彫りになった。

最後に、シンポジウムのコーディネーターを務めた建石真公子氏がまとめとして「医学は性別の決定に関わる重要な領域であるが、その決定に必要な要素には、多くの不確定な部分、明らかになっていない部分が残されている。性別の決定に関わる医学の領域は、人文・社会科学の研究成果も踏まえながら、さらに進展することが望まれるであろう。複数の研究領域からのアプローチを通じ、性別に対する人々の考え方も変化していく必要があるのではないだろうか。さらに、どの研究領域も多様な人間の現実に応じた変化が求められているように思われる。」と述べ、シンポジウムは終了した。

#### 5. 参加者の感想

当日の参加者から回収した感想アンケートでは、「ジェンダー論を扱うシンポジストの報告があれば、よりディスカッションが深まったのではないか」「アンドロゲンや脳の重さなどといった医学的な性の分化の仕組みよりも、スポーツのような社会的・文化的な活動の中では、教育などのあり方も強く影響するのではないか」「医学では男・女の区別を決定することに研究が熱心に行われているにもかかわらず、男・女の区別のなさが研究されることが少ないように思われる」「医学が性別を決定できると考えることや当然のように性別は存在すると考えられていることには疑問を感じる」「スポーツ文化やスポーツ教育とジェンダーの関係についてももっと掘

り下げて欲しかった」など、多様な意見がみられた。

どの参加者の感想にも述べられていたのは、  
「様々な領域で性別について考えられていることとそこでの研究成果を知ることができ、非常に有意義であった」「様々な分野からのアプローチが一つのテーマに対する理解を大変深くさせるように思った」といったご意見であった。



<参考資料>

2003 年度第 9 プロジェクト主催

体操フェスティバル OSAKA と国際交流

—「手作りの出発」から「夢の実現」へ—  
NPO法人MGLA (体操リーダー連絡協議会) 竹内  
ちよ子

NPO法人MGLA・帝塚山学院大学 飯田  
貴子

I. 体操フェスティバル OSAKA 国際大会の概要

Gymnastic Festival OSAKA (GFO)

- ① 目的 体操の交流と各地域の体操振興を  
はかり、あわせて、健康増進と活力ある  
充実した豊かな生活に寄与する。
- ② 性格 地域、年齢、性を問わず、体操の  
ジャンル、その性格、活動にとらわれな  
いで、体操の交流を目的とした楽しく集  
えるフェスティバルである。
- ③ 主催 NPO法人MGLA (体操リーダ  
ー連絡協議会)

<NPO 法人 MGLA の紹介>

Meeting of Gymnastics Leaders for All (MGLA)

全国各地で活動が続ける体操リーダー  
が協議の場を持ち、情報を交換し合い、  
助け合いながら仲間として一緒に向上し  
ていくことを願って発足した。

創立：1983 年 (2002 年に NPO 法人)

会員数 (2003/4/20 現在)：395 名

組織：理事 8 名 (会長、副会長を含む)

監事 2 名 運営委員 10 名程度

活動：体操フェスティバル OSAKA 国際大  
会の開催

研修会、体操講習会の開催

海外体操祭への参加

各種スポーツイベントへの協力

機関誌の発行

- ④ 主管 GFO 実行委員会  
MGLA 実行委員 10 名 外部実行委員 17  
名 当日役員 約 60 名
- ⑤ 日程 毎年、10 月第 3 金曜日から 3 日間
- ⑥ 内容 <20 回記念大会> 参照
- ⑦ 諸経費 主として参加者の負担金による  
ほか、広告、協力金等によりまかなう
- ⑧ 20 回大会 (2002 年) までの記録  
1~20 回大会 (延べ)：国内出場グループ  
2,335 グループ  
海外参加国：参加人数 63 か国 1,110 名  
参加人数 140,500 名

<体操フェスティバル 2002 OSAKA 国際大会  
第 20 回記念大会>

～ありがとう を あなたに～

10 月 18 日 (金) 表敬訪問 (大阪市役所)  
シティ・パフォーマンス (OCAT ポンテ広場  
大阪市庁舎前)

シアター・パフォーマンス (大阪厚生年金会館  
大ホール)

祝賀会、ウェルカム・パーティ (大阪厚生年金  
会館フロールの間)

10 月 19 日 (土) 国際体操リーダー・セミ  
ナー (大阪市中央体育館 サブアリーナ)

10 月 20 日 (日) フェスティバル・デイ 日  
本体操祭 in OSAKA (大阪市中央体育館 メイ  
ンアリーナ)

エントリーグループによる演技 (発表演技数 45)  
海外グループ演技 (オーストラリア、中国、デ  
ンマーク、スウェーデン、オランダ、フィンラ  
ンド)

主催者企画プログラム（マストラップ、ふれあいプログラム等）

主催者（MGLA）演技

GFOにおける国際交流は、海外の体操祭から草の根国際交流へ、組織から個人へと広がる。

（担当 飯田貴子）

## Ⅱ. 体操フェスティバル OSAKA 国際大会の特徴

### ① 生涯スポーツイベント／「人生の採、生きる感動との出会い」

参加者は性、年齢、障害の有無、地域や国を問わない。スポーツ・フォア・オール。スポーツを文化として生活のひとコマに。人生を豊かにする体操。

### ② 長期継続型

1983年より毎年10月に開催し、2003年は21回大会であった。継続は力なり 積み重ねによってイベントの純度を高める。マニュアルノウハウを身につける。次年度（未来）に向けての希望や意欲をかきたてる。

### ③ 非競技的

競技でない体操の交流が目的であるため、結果よりも過程を重視している。それぞれの年代において、発表や活動の場を通し自己実現をはかる。それらの活動は深い感動と喜びをもたらす。

### ④ 参加者負担

公予算でなく、参加者のエントリー費や協力金（カンパ）等で運営している。

やりたいことを手作りで行う大会。

### ⑤ 民間主催／スポーツボランティア

主催はNPO法人MGLAであって、女性が中心となっている。人づくりとヒューマンネットワークの形成。GFOの運営活動を通して多様な人間関係を発展させ、さらにこれらの活動は、常に学習を続けさせ、創造的活動を維持させる。こうした学習の結果として豊かな生活や人間的成熟（教養）を生み出す。また、イベント運営のノウハウが手元に残る。

### ⑥ 国際交流